

日本・アジアのキリスト教—無教会キリスト教の系譜(8)

芦名定道

日本・アジアのキリスト教の歴史を振り返りつつ、その新しい思想的可能性を探ることは、日本におけるキリスト教思想研究にとって重要な意味を有している。この演習では、年度や学期を超えて、無教会キリスト教の思想家たちを順次検討してゆくことによって、近代キリスト教思想の重要な局面の解明がめざされている。今年度前期は、昨年に引き続き、無教会キリスト教における内村鑑三の後継者の一人である、南原繁のテキストを読み進める。

<演習のスケジュールと場所>

演習日(後期・水3): 10/4, 11, 18, 25, 11/1, 8, 15, 22, 29, 12/6, 13, 20, 27, 1/11, 18

場所: キリスト教学研究室

<テキスト>

・内村鑑三『社会の変革』(選集6、岩波書店)

戦中・戦後の日本のキリスト教と愛国心

<内容>

- 1 問題
- 2 近代日本とキリスト教—戦前・戦中・戦後
- 3 キリスト教と愛国心・ナショナリズム
- 4 展望

1 問題

1. 現在、キリスト教にとって、なぜ愛国心は問題なのか。

・「『愛国の作法』には、既存の『愛国』の反復形成ではなく、戦略的な柔軟性をもった新たな『愛国』のあり方を探る意図がこめられています。大切なことは、国を愛することや愛国心を、夜郎自大的な一部の「右翼」的な人々の専売特許にしておかないことです。もっとしなやかに、そしてしたたかに国を愛することや愛国心について語り、議論することが必要なのです。」(姜、12)

2. 「近代日本とキリスト教」に関して。日本において民主主義はいかにして根付くことができるか。

・ティリッヒ『キリスト教と諸世界宗教との出会い』(1962年)

「日本は、民主主義を戦勝者の手から感謝して受け取った。しかし、民主主義は、それにとって都合な社会的諸前提を必要とするが、それと同じ程度に、精神的な根づきを必要とする。そして、民主主義のさまざまな精神的な根が、日本には欠けている」、「神道も仏教も」(著作集4、白水社、87)。

「傍聴者は自問する。「このような事情でのもて、日本のデモクラシーは可能なのだろうか。一つの政治体制を模倣することが精神的基盤の欠如を補うことができるのだろうか」と。」(ティリッヒ、123)

3. 近代現代、戦後、市民社会など、問い自体が問題である。

「批評家の加藤典洋」「一九九七年の『敗戦後論』」「加藤のいう「革新派」は、共産党も南原などを無視して成立している観念なのである。」(小熊、15)

4. 日本においてキリスト教を問題にする意義。日本社会にとって、そしてキリスト教自体にとって。近代日本論で欠落してきたのは、「キリスト教」という視点。

「文化を通過していく間接的な道」「個人的な対話」。「日本のように、ほとんどあらゆる

階級がかなり高い文化的段階にある国では、伝道の効果はきわめて僅かである。「むしろ、キリスト教的ヒューマニズム」。「すべてのアジアの宗教に置いて決定的なのは、むしろキリスト教の間接的で文化的な影響であって、キリスト教の伝道活動ではないからである。」(ティリッヒ、112)

2 近代日本とキリスト教—戦前・戦中・戦後

8. 二つの地平。「近代キリスト教の地平」と「近代のアジア・日本の地平」。

9. そもそも日本とは？ 近代日本＝「戦前・戦中・戦後」とはいかなる時代だったのか？ 生存を賭けた選択、競合するベクトル。

・戦前から戦中：国民国家へ、

二つの近代（近代の二つの形）：西欧的なリベラリズムか絶対王政か。

・戦後から現代：グローバル化の中で

国民国家を内包した（相対化した）広域的秩序形成へ。まず政治的に始まり、そして経済的に実現される＝政治に対する経済の優位。

10. 「近代」近代以降の国家・民族、キリスト教

・国家：国民国家・個人主義の時代

・国教会と自由教会：国教会も近代的な意味で。

11. キリスト教なき近代の問題性

12. 近代の問題であり、近代日本キリスト教の問題でもある。

個人主義的な近代、これはキリスト教にも、日本のキリスト教にも影響している。

3 キリスト教と愛国心・ナショナリズム

13. 「二つの地平」→「伝統と状況」

14. 無教会キリスト教の場合。

「内村鑑三」「二つのJ」「もう一つの問題として「我は日本のため」という際の「日本」概念に曖昧さがつきまわっているという問題がある。ここでの日本とは何か必ずしもはっきりしない。「理想の日本」と「現実の日本」。「国家」「民族」「文化」「社会」の区別が明瞭ではない。」(近藤、354)

「内村にあって「愛国心」と「ナショナリズム」の区別は不明確である。」(近藤、355)

「内村の日本的宗教心の異常なほどに高い評価の中には、彼の思想家としての単純性や一種の偏狭さが現れているのではないかと疑われる。」(近藤、358)

15. 「「愛国心」は「愛郷心」の「自然な」延長にすぎないのでしょうか。そうではありません。」(姜、130)

「近代の国民国家は、まさしくそのような「パトリア」の連続的な拡大（故郷の村・町・地方から故郷の国へ）を切断するところではじめて成立したのです。」(姜、147)

「「愛郷（心）」と「愛国（心）」は両義的な関係にある」(姜、155)

18. 矢内原忠雄『国家の理想——戦時評論集——』（岩波書店、1982年）所収の1930年代の諸論考。

・「日本的基督教といふのは、西洋かぶれのしない基督教といふこと」であり、思想的経済的に西欧キリスト教会から自立した日本人による日本伝道を行う教会、つまり、矢内原の師である内村鑑三の目指したキリスト教に他ならない（矢内原、116）。

・日本的キリスト教は、「日本人の心によつて基督教を把握するといふ事」であり、(同書、437)、矢内原は次のように明言して憚らない。「基督教は日本精神の美点を發揮するものであると共に、其の足らざるを補ひ、及ばざるを純化すべきもの」であつて、「基督教は我が国体に反しないといふことが、基督教会の繰返しての主張であり、又其の実行でもある。私もさう信じる一人である」(同書、118)、と。したがって、キリスト教は単なる外来宗教ではなく、日本人の心情に根差したものとなるべきであり、またそうなることは可能なのである。

・「日本的基督教の使命は、第一には、日本人の心によつて基督教の深い真理を、深い深

い基督教の真理を新に把握する、新なる角度から把握する、之が第一であります。第二には、斯くして把握したる基督教によつて日本の国を高める事である。さうして日本の国によつて世界を高める事であります。」(同書、438)

19. 日本に対する滅亡預言。足尾銅山事件に現れた富国強兵に奔走する日本。

「亡ぶべき日本あり、亡ぶべからざる日本あり、貴族、政治家、軍隊の代表する日本、これ早晚必ず亡ぶべき日本にして、余輩は常に予言して止まざる日本国の滅亡とはこの種の日本を指して云ふなり。」(内村鑑三『世界のなかの日本』(内村鑑三選集4)、岩波書店、1990年。124頁)

「日本国が如何に危険の地位にあるかは鉱毒事件を見て最も良く察することが出来るのであります。滅亡です、滅亡です、日本国の滅亡は決して空想ではありません」(132-133)。

滅亡預言という仕方で遂行される、日本キリスト教の愛国的使命。

20. キリスト教は愛国的たり得るか。

- ・「キリスト教とナショナリズム」は聖書テキストに遡った検討が必要になる。
- ・現代聖書学は、近代的な個人主義的聖書解釈に変更を迫っている。
- ・イエス・パウロと国家。

M・J・ボーグ『イエス・ルネサンス——現代アメリカのイエス研究』
教文館、1997年。

David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*. Third Edition,
Bloomsbury, 2015.

4 展望

22. 現代日本の状況に対して。

批判という課題。しかし、「批判」すればよいという自己満足的批判ではなく、現実にかみ合う批判であること。

23. 地域・市民社会から国家・民族、そして国際・グローバル化までの現実を視野に入れた神学の理論展開、そのために研究所の役割。

批判から形成へ、あるいは形成を前提とした批判。

「ナショナルな目標を達成するためには、ナショナルな枠組みを超えなければならないのです。」(姜、198)

内村鑑三の聖書論 <http://tillich.web.fc2.com/sub12.html>

一次文献

- (1) 文学としての聖書 (明治31年3月28日)
- (2) 聖書の話 (明治33年9月30日～34年1月22日)
- (3) 聖書 (明治33年12月21/23/27日)
- (4) 聖書は如何なる意味に於て神の言辭なる耶 (明治35年4月20日)
- (5) 余の聖書 (明治35年6月14/15/16日)
- (6) 三条の金線 (明治36年4月23日)
- (7) 聖書は果して神の言なる乎 (明治37年1月21日)
- (8) 聖書とキリスト (明治37年9月22日)
- (9) 聖書の真髓 (明治37年11月17日)
- (10) 大阪講演の要点 (明治39年12月10日)
- (11) 聖書の研究法に就て (明治40年3月10日)
- (12) 健全なる聖書研究 (明治40年5月10日)
- (13) 高等批評に就て (明治41年9月10日)
- (14) 新約聖書に現はれたる思想の系統 (明治43年12月10日)
- (15) 新約聖書の預言的分子 (明治44年5月10日)
- (16) 聖書研究の話 (明治44年8月10日)
- (17) 艦隊として見たる新約聖書 (大正元年11月10日)

- (18) 聖書は如何にして成りし乎 (大正5年4月10日)
- (19) 聖書研究の目的 (大正5年5月10日)
- (20) 日本に於ける聖書の研究 (大正5年6月10日)
- (21) 聖書の読方 (大正5年11月10日)
- (22) 聖書の欠点 (大正6年1月10日)
- (23) 聖書の預言的研究 (大正7年1月10日、2月10日)
- (24) 三条の縄 (大正7年6月10日)
- (25) 聖書全部神言論 (大正7年11月10日)
- (26) 聖書無謬説に就て (大正8年9月10日、10月10日)
- (27) 聖書の中心に就て (昭和3年8月10日)
- (28) 聖書と基督教 (昭和3年8月10日)

<目次>

- I 聖書本質論
- II 聖書解釈学
- III コンテキストとレトリック
- IV 宗教と科学

I 聖書本質論 (＝聖書とは何か)

1. 聖書の二重性

「神の聖旨を人の手を以て写したるもの、是が聖書であります。
聖書は神の心を伝へた書であります。」(2/26)

内村の聖書理解の基本は、聖書が「人の手」と「神の聖旨」の二重性を持つ、という点に認められる。「神の聖旨」は「神の心」「神の言」「神の言辞」「聖書の精神」「聖書の理想」などとも言われるが、しかし、その一方で聖書も「人の手」によるかぎり、齟齬や内的矛盾、誤謬を免れていない(聖書の不完全性)。したがって、聖書が神の言であり、無謬であると言う場合(聖書無謬説)、それは説明を必要とすることになる(25/227)。内村のテキストには、「聖書は不完全である」(「聖書の無謬説を唱ふるものではありません」(28/313))と「聖書は無謬である」(「余は聖書の無謬を信ずる」(25/226)、「事物の宗教的意義を示す上に於ては少しも誤りません」(7/90))という一見、矛盾した主張が見られるが、これは聖書の二重性のいずれに焦点を当てるかによって生じたものと解することができるであろう。さらに、この聖書の二重性(神の言にして、人間の言)は、神学的には、キリスト両性論に基礎づけられると言えよう。今回取り上げた文献の範囲では、このキリスト論を内村がいかに関心しているかは不明であるが、内村がナザレのイエスと再臨のキリストの両方を視野に入れていることは明らかである。

2. 聖書自体が崇拜対象ではない。キリスト>聖書>教会(教派)

まず、聖書は教会(教派の組織・思想・儀礼など)に優先する。もちろん、歴史的には聖書が教会において形成されたことを、内村も認める(18/181)。しかし、「聖書は教会に拠って立つ者ではない、教会が聖書に拠って立つ者である」(10/126)。歴史的なキリスト教会や伝統的な諸教派への批判、あるいは聖書によるそれらの相対化は(16/170)、宣教師への依存の脱却と共に、内村の無教会主義の立場を示すものと言えよう。したがって聖書研究は、教派的伝統から自由に行われる「自由研究法」(10/127)でなければならない。しかし、これは教派主義を聖書教(聖書という書物の崇拜)に置き換えたものではない。これはすでに見たように内村が単純な聖書無謬説を取っていないこと、また以下論じるように近代聖書学における科学的分析的な聖書学を一定の範囲内ではあるが、高く評価していることにも現われている。しかし、ここで確認したいのは、こうした聖書の相対化が、キリスト

との関わりで為されていることである。「キリストが解るまでは聖書は解らない、キリストは聖書の精神であって、聖書以上である」(8/108)、「聖書はイエスキリストに就て証するものあること」(9/112)、「聖書の要点はキリストの十字架に在ると云ひて正鵠を失はないと信ずる」「それは活けるキリストである」(27/310)。この聖書の主人公としてのキリスト(14/150)は、聖書という書物を超えた、人類的また宇宙的な実在(「人類宇宙通有の生命」(19/186))であって、聖書研究の目的はこの生命であるイエスを聖書を通して知ることにあるのである(19/186, 14/150)。したがって、イエスの生命は「恒久不変」であっても、書物としての聖書自体は永遠ではない(14/151)。「神の言辞は旧約三九卷新約二九卷位にて書き尽くされるものではありません」(4/66)、「天国に在りては聖書は要らない」(14/151)。

3. 聖書テキストの統一性

書物としての聖書がキリスト教共同体において形成された諸文書の集成であることは、内村の聖書理解の前提である。「是れは文集でありまして文学であります」(9/109)。これに類似した主張は内村のテキストの随所に見られるが、ここで生じる問題は、では、聖書は単なる「寄せ集め」(9/109)、「偶然に一書して綴られた書」(9/111)に過ぎないのか、ということである。つまり、聖書の統一性の問題である。ここでは、まず、聖書の統一性を内村がどのように論じているのかを、次にその統一的な聖書の内容がいかにより説明されているのか、をまとめてみよう。

まず、聖書の統一性であるが、内村は、新約聖書の読み方の多様性に関連して、「其見方の異なるは見る人の立場と人とが異なるからである」(14/150)と述べている(cf. (2/47))。つまり、読み手、解釈者との関係を離れて、その意味で客観的な仕方で、66の文書からなる聖書の統一性を論じることはできない。問われるのは、「聖書六十六卷は一つの完備せる書である、之を一つのオルガニズム即ち有機体として見る事が出来る」(27/308)という場合の、「～として見る」という解釈学的視点である。これを内村は、聖書の精髓、要点、中心と呼んでいる。もちろん、理解しようとする対象を統一的に把握する視点としての中心は、客観的に存在するわけではなく、内村にあっては、それは、聖書の諸文書の中心を活けるキリストとして把握すること(=信仰)によって、始めて可能となっていると言わねばならない(聖書は「信仰的に見れば完全無欠の書」、「聖霊に由りて」、神の事を知る機能としての「良心」「改悔めたる心」(11/131))。ここで我々は、次に論じる聖書解釈学の問題に踏み込むことになるが、聖書の統一性とは、読み手の実験において確認される、テキストの中心と読み手の視点(信仰)との相関関係の問題と言えよう。つまり、読み手の関与と切り離して統一性が存在するわけではない。しかし、それは信仰者個人の主観の産物でもないのである(討論可能な相互主観的な構造を有するという点で)。内村の聖書理解は、内容的に現代の解釈学の問題に密接に関わり合っていると言えよう(聖書理解に関する「同情」の意義の指摘など(22/206))。

次に、統一的に把握された聖書の内容であるが、内村は、通読によって大略を知ることの必要性を指摘するだけでなく(2/34-35)、様々な観点から、その統一性を具体的に論じている。ここでは、内村の聖書神学の内容には踏み込まず、思想的な統一性に関して、いくつかの議論を紹介するとどめたい。

たとえば、内村は、伝道という視点から、人々をキリスト教に回心させるための戦略として、新約聖書を「艦隊」にたとえている(17/178)。つまり、聖書の諸文書は、一様な統一性において見られるのではなく、構造的な統一性(有機体)として捉えられるのであり、特に内村は、三という数によって、聖書の思想構造を様々な観点から分析している。

(a) 「三条の金線」としての信、望、愛(6)

「三条の金の糸が聖書を其始めから終りまで貫いております」(6/80)

(b) 新約聖書の思想的な「三系統」としてのヤコブ系、パウロ系、ヨハネ系(14)

「使徒ヤコブは実践的である、使徒パウロは信仰的である、使徒ヨハネは心霊的である」、
「モーセは律法の根である、ヤコブは基督教の幹と枝である、パウロは基督教の葉と花
である、而してヨハネは基督教の熟したる実である」(14/143)

(c) 聖書の「三つの部分・分子」としての歴史、教訓、預言(15)

「聖書は三つの部分より成る、其第一は歴史である、其第二は教訓である、其第三は預
言である」、「聖書は其全体の組織に於て三分的である」「歴史的分子、教訓的分子、預
言的分子」(15/153)

(d) 「三条の縄」(24)

「聖書は歴史であり、実験であり、預言である」(24/217)

まず、(a)は、いわゆるキリスト教的三徳という観点から議論であるが、注目すべきは、
この三徳が、旧約から新約のすべてのテキストの三重構造を示すものであるとともに、信
仰から希望、そして愛という「信仰の生涯の順序」(6/81)でもあるという点である。テキ
ストには、共通構造(三重構造)と強調点における進展(多様性とその系譜)が存在し、
それが、さらに信仰者の信仰プロセスと関連しているのである。同様の構造は、(b)にお
いて、基督教の歴史的展開というレベルとの関連において論じられる(ヘーゲルの影
響による原始基督教の発展図式との対応は興味深い。ペテロからパウロ、そしてヨハ
ネへ)。この聖書の三分子は、新約聖書の諸テキストを系統づける構造であると共に、「神
の黙示」の「漸進的」な進展(ユダヤ人から異邦人、そして全人類へ)を示しており(14/143)、
こうして読み手は、漠然と聖書を通読するのではなく、「我等は先づ聖書を其思想の系統
に循つて究むべきである」(14/149)と勧められるのである。次に、(c)と(d)であるが、こ
れらは、基本的に同一の視点からの議論であり、旧約聖書学で言う、律法・歴史文学、知
恵文学、預言書という文学ジャンルに相当するものと言える。しかし、ここでも、あるテ
キストがどのジャンルに属するのか(=三つの「部分」)、ということよりも、すべての
テキストが三つの「分子」を有することが議論のポイントである。内村が強調するのは、
通常歴史や教訓として区分されるテキストが預言でもあるということであり、具体的には、
「山上の垂訓」はこうした点からその預言としての意義が詳しく論じられている。また、
歴史、教訓、預言は、聖書の時間構造(過去、現在、未来)を表現している点にも留意す
べきであろう。「過去の事実(歴史)に其基礎を置き、未来の希望(預言)に其実現を期
する道徳である」(15/152)。

II 聖書解釈学(聖書をいかに読み・解釈し・研究するのか)

内村の聖書本質論に続いて、彼の聖書解釈学へ議論を進めよう。ここでの議論も二重性
によって規定されている。以下、この二重性をインスピレーションと聖書学というテーマ
に関して説明し、内村の聖書解釈学の基本的立場を明らかにし、合わせて、内村が学んだ
聖書学の内容、聖書の思想と諸学との関わりも論じることにしたい。

1. インスピレーション

先に、聖書とは何かという問題との関連において、聖書の読み方・見方の問題に言及さ
れたが(聖書の諸文書における統一性の認識は、読み手の視点に関連していた)、これは、
まさに聖書解釈学の問いに他ならない。つまり、聖書本質論は聖書解釈学を要求するの
である。

内村鑑三の聖書解釈の基本にあるのは、霊あるいはインスピレーションの問題である。
つまり、霊を霊によって理解するという考えである。まず、聖書に関して問題となるイン
スピレーションは、聖書テキストの成立について、つまり、聖書が神の靈感によって成っ
たという伝統的議論に対応するものとして展開される。

「聖書のインスピレーションとは神の霊が人の霊に降て之を活発せて事を為さしめると

云ふ事であります」、「神の霊が人の霊に降て、人をして自由に書かせたものであります」、「霊は相互に合一することが出来るものであります」(7/104)

しかし、霊の問題は、人間の手による聖書テキストの形成と神の霊の働きとの関わりについてだけでなく、聖書を理解する場合にも問題となる。聖書は神の霊と霊的に合一した人間の手によるものであって、それゆえに、聖書は霊的なものであるとするならば、霊的な聖書を適切に理解するにも、霊的な一致が重要な意味を持つことになるはずである。内村は、「聖書は精神の書でありますから、我が精神さへ聖書の精神に合へば之を学ぶのは至て易い事であります。」(2/36)と述べているが、これは、聖書理解が聖書の精神と読み手の精神の一致、つまり霊的な一致を意味していると解することができるように思われる。「霊のみが霊なる神を認ることが出来ます」(4/66)、「聖霊に由て書かれた聖書は聖霊に由らざれば如何にしても判明らない」(11/131)。こうした聖書の成立と読解におけるインスピレーションの問題は、内村においても、パウロ以来の伝統的な「文字と霊」という議論に関わっている。

「聖書は神の言辞であります、即ち神の心を私共に伝ふる書であります、然しながら心は文学ではありません、心は文字に於て顕はるる者であります、即ち文字の中に含まれ居る者であります、私共は聖書の不完全なる文字の中に完全なる神の心を探るのであります、是れ即ち聖書研究の目的であります」、「聖書其物は普通の書物と少しも異なりません」、「其紙とインキとの中に匿れて居る真理を発掘して始めて聖書が神の言辞となるのであります。」(4/70)

こうして、文字としての聖書テキストとそこに表現された神の心・精神を理解すること、あるいは人間の手になる聖書が神の言葉になること、これが、聖書解釈の問題であり、聖書研究はそれに向けた作業として位置づけられるのである。

以上より、聖書との関わりにおけるインスピレーション理解は、次のような二重性を有することになる。それは、一方における聖書理解のためのインスピレーションの必要性についての確認と、他方におけるインスピレーションの過剰に対する注意の喚起である。内村は、伝統的な靈感説を取る点で、近代聖書学の原理と一線を画しているが、それは、霊的な熱狂主義や逐語靈感説的な原理主義とも、区別されねばならない。「私は斯く云ふて聖書の無謬説を唱ふるのではありません、聖書は一言一句悉く神の言なりと云ふのではありません」(28/313)。この見解は、感情の過剰に対する批判に関連していると考えてよいであろう。すなわち、

「感情は之を人より得べきではない、直に之を神より得べきである」、「故に感情的の説教や演説は成るべく避くべきである」、「所謂は信心的書類は甚だ危険なる書である、読書は成るべく丈け乾燥無味なるを良とする」(12/135)。もちろん、あらゆる意味における感情が否定されているわけではない。問題は感情から真理が理解されるのではなく、真理の理解にこそそれにふさわしい感情が伴うということなのである。「然しながら斯かる研究に由て神の真理は会得せらるるのである、爾うして一たび神の真理を会得したる以上は清き感情(寧ろ感想)は滾々として我等の心裡より湧出づるのである」(12/136)。

こうして、議論は聖書研究の方法論、つまり聖書学へと展開することになる。内村が主張する適切な聖書研究とは、過度の感情を抑制した「静かなる敬虔深き科学的の研究」であり、その点で、いわゆる「リバイバル的の聖書研究法は成るべく避くべきである」とされるのである(12/136)。

聖書学の評価へ議論を進める前に、聖書解釈の二重性として、もう一つ例を挙げておこ

う。それは、聖書理解は困難であり研究を要する(2/34)、しかし同時に、容易であるという二重性である。以下に具体的に見るように、「聖書を十分に解釈致しませぬのは随分六ヶ敷い事であり」(2/33)、それ相応の努力を必要とする。「私共は先づ学者の態度を以て之に臨まねばなりません、信者の間には聖書は神の御詞であるが故に誰にでも直にわかるものであると考へる人々もあります、其熱心は諒すべきものでありますが併し之は誤まれる考であると云はねばなりません」(16/170)。しかし、同時に忘れてならないのは、聖書研究は聖書についての価値判断(神の言葉であるか否か)については、いわば中立的なものであり、信仰を基礎づけるものではないこと、また聖書研究において要求される教養が信仰的な聖書理解を生み出すものではないということである。むしろ、研究を要するという主張の他方でなされるのは、聖書を理解することは、特定の教派に属していたり、特殊な教養を身につけたりしていることを前提にするのではなく、聖書は万人に開かれているという主張である。「聖書を以て世に所謂聖人君子なる者の読むべきものであると思ふのは大間違ひです。聖書は平民の書でありまして最も人情の書であります」(2/28)、「聖書が聖書たるのは其が万人の書であるからでなくてはならない」、「能く解る書でなくてはならない」(5/77)。学者の態度を要する万人の書という一見すると矛盾した事態は、聖書解釈についてさらに考察を深めることを要求する。おそらく、この点において重要なのは、「実験」という概念であろう。この点に進む前に、内村の考える聖書研究の方法論の内容を具体的に見ておこう。

2. 聖書学、その役割と限界

内村による近代聖書学(とくに、高等批評)への評価は、信仰の敵ではないが、信仰を基礎づけるものでもない、と要約できるように思われる。明治41年の「高等批評に就て」に見られる次の文章は、こうした内村の聖書学理解をよく表している。

「緻密と忍耐と謙遜とを要する学究である、爾うして学究である故に信仰を起す者ではない、学究の達する所は蓋然である、信仰ではない、故に批評に由て神の存在に關する信仰は否定されない」、「基督者は聖書に由て神を信ずる者ではない、神を信ずるに由て聖書を信ずる者である、聖書は信仰上の最大参考書である、併し其憑典ではない、批評の奏したる大なる功績の一つは聖書の文字に依る信仰を壊つたことである、神は靈であるから、彼は靈に由てのみ之を認めることが出来る」(13/139)。

「批評は学問であるから、学問の範囲を出てはならない」(13/139)と言われるように、聖書のより深い理解に向けた道具として、聖書学は現代人にとって必要かつ有効な手段であるものの、それに分を超えた過大な期待をかけることは間違っている。信仰にとって聖書学が有する意味に関しては、過小でもなく過大でもない、冷静な判断が必要なのである。この点で、内村の議論(その役割と限界)はバランスがとれたものと言えるであろう。しかしまた、内村の近代聖書学理解は、さらに次の点で、きわめて注目すべきものと言える。それは、近代聖書学あるいは自由主義神学における黙示的終末論(再臨、復活)の喪失という問題である。黙示的終末論については、ヴァイス、シュヴァイツァーによって19世紀末に始まった聖書学の転換が第一に指摘できる。しかし、こうした20世紀の聖書学を規定する新しい動向と類似した議論を、我々は内村において確認することができる。

「然るに今時の聖書研究は如何? 今時の聖書研究は大抵は来世抜きの研究である、所謂現代人が嫌ふ者にして来世問題の如きはない、……彼等は聖書を解釈するに方て成るべく之を倫理的に解釈せんとする、来世に關する聖書の記事は之れを心靈化せんとする」(21/203)、「基督者とは素々是等現代人の如き者ではなかつた」(21/204)。

「イエスは単に大教師ではない、神より人類の審判を委ねられ給ひし大審判者である」(21/214)。

新約聖書が描くイエスは、19世紀的な市民社会の道徳の教師ではなく、来世についての預言者として理解されねばならないのであって、近代的なキリスト教の問題点は、こうした預言する力の喪失にこそ存在しているのである。

「近代人の所謂道徳の其説の美しきに拘らず人を化するの力なきは、彼等に此事実を視るの眼、即ち預言の力がないからである」(21/214)。

以上よりわかることは、聖書学および神学における黙示的終末論の再発見という、19世紀から20世紀にかけてのキリスト教思想の問題状況に、内村も立っているということである。そして、さらに内村の場合は、キリスト教の過去の思想として黙示的終末論(内村の言う「預言」)を再発見するだけでなく、近代の状況における黙示的終末論の積極的意義の主張にまで進んでいる。これは、古代と近代の差異を強調し、その上でイエスの宗教の倫理的意義を導出しようとするヴァイス、シュヴァイツァーとは、異なった立場と言わねばならない。いわば、内村で問われているのは、近代的な批判と懐疑を経た上で聖書的な預言の現実性を取り戻すこと(批判を経た素朴さ)であり、ここにこそ思想的な困難が存在しているのである。なぜなら、ここにおいては預言の現実性の強調と近代人であることとを一つの信仰において結合することが求められているからである。内村において、この困難を解決する場として機能しているのは、次に見る「実験」であったのではないだろうか。

3. 実験における了解

適切に用いられた聖書学が信仰を助けることはあるとしても、聖書学が信仰を生み出すことはない。これが内村の基本的見解であった。では、信仰はいかなる仕方で生まれるのであろうか。もちろん、これについては、聖霊論などキリスト教神学的な議論も可能であるが、内村の場合は、「実験」がポイントであるように思われる。実際、「実験」という用語は、時期を問わず内村のテキストにおいて繰り返し現われている(3/33, 5/78, 7/98, 16/173, 19/187, 21/197, 25/232など)。それは、たとえば「余は聖書無謬を信ずる」(25/226)、「余は聖書に由りて始めて自己の罪人なる事を悟った」(25/232)とあるように、科学的あるいは歴史学的な実証とは別の次元にある神や自己に関わる根本的事実(実証可能な個々の事実の実証基盤に関わる事実)についての認識に関係している。この点で、内村の実験は、主体的真理とか実存的自己理解と言われる事柄に比較されるべきものと言えるかもしれない(ブルトマンとの比較研究)。しかし、ここでは、内村自身のテキストから、関連するいくつかの問題を指摘しておきたい。

まず、聖書のメッセージの事実性の認識は、歴史的証明によって可能になるのではなく、自分自身の実験による以外にないと語られる。「歴史的証明は如何に強くとも私共は之に由て私共の経験以外の事はどうしても信ずる事は出来ません」(7/100)。実際、「若し基督教が歴史的宗教である云ふ訳から歴史的証明を得るに非れば之を信ずることが出来ないと云ひますならば世に真面目に基督教を信ずる者は一人も無くなる訳であります、私は基督教を転覆するやうな歴史的事実の挙がる時は未来永劫決してないと思ひます」(7/98)。これは、聖書学が信仰を基礎づけないという先の議論と同じことを述べたものであるが、聖書解釈とは、聖書を学問的に解明する手続き・手法に尽きるのではなく、それは、聖書のメッセージを読み手の実存的自己理解に媒介する地点にまで進まねばならないのである。

次に、信仰者の実験は、聖書が神の言葉として理解されるという事態と相関している、あるいは実験は聖書が神の言葉となる場、聖書の預言が自己の主体的事実となる場と言える。「其紙とインキとの中に匿れて居る真理を発掘して始めて聖書が神の言辞となるのであります」(4/70)。聖書はいわゆる客観的実体的に神の言葉で「ある」のではなく、実験において、出来事的に神の言葉に「なる」と言わねばならない。これは、ブルトマン学派

において、「言葉の出来事」と言われる問題である。このことを内村は、次のように具体的に示している。聖書が神の言葉であることがわかるのは、「然らば聖書は何にが故に神の言辞であるかと申しまするに、勿論其中に神にあらざれば到底語ることの出来ない事が書いてあるからであります」(4/66)。たとえば、「聖書は悪は自由意思を授けられたる人類が任意的に其造主なる神を離たことであると云ひます、事甚だ簡明でありますが其中に深遠にして量るべからざる所あります、私共は聖書の此告示を聞いて始めて罪惡の深源を暁る事が出来るのであります」(4/67)とあるような仕方で、人間が自らの罪を聖書的な意味で自覚するのは、実験において生じる出来事的事態であり、同様のことは、贖罪、愛、復活、再臨にも当てはまる。この実験こそが、信仰者が直接依拠できる事実なのである。「今日私共基督教信者が実験する事が事実であります以上は聖書に書いてある之に類したる事柄は少くとも其大躰に於ては必ず事実でなくてはならないからであります」(7/98)。聖書のメッセージの事実性は信仰者の実験的事実において確証される言つてよいであろう。

最後に、「実験」に関連して「良心」の働きを指摘しておきたい。「神のを知るための機能は人の良心である」、「良心に由らずして人は神を知ることは出来ない」(11/132)。この場合の「良心」とは、実験的事実が信仰者の実存において生じるための場であり、神の言葉の出来事を受容するものとして機能している。こうした内村の「良心」理解を、キリスト教思想史の中に位置づけることは、おもしろい研究テーマと言えよう。

4. 聖書学の内容

次に内村が聖書研究で用いている聖書学の内容について見ておきたい。まず、内村が19世紀の神学校で教えられているような聖書学的な基礎知識を身につけていることは、明治33年の「聖書の話」などの記述より明らかである。「所謂天然を透ふして天然の神に達するとは聖書の神を探ぐる法でありまして、是れ亦実に近世の科学の精神であると思ひます」(2/28)というように、近代科学と聖書学との精神性を論じた上で、内村は、聖書地理、聖書博物学、聖書考古学、聖書年代記、聖書歴史、原語といった聖書研究の具体的な道具立てについて説明してゆく、また、明治35年の「聖書は如何なる意味に於て神の言辞なる耶」では、聖書の近代語訳や聖書の原典・写本に関する諸問題を取り上げ、「聖書は一点一画の誤謬なき神の言辞であるとの説は之を信ずるに至て易いようには見えませんが、然し少しく精細に聖書を究め見ますとその容易には受取れない説であることが解ります」(4/63)という論点を具体的に展開している。さらに、明治41年の「高等批評に就て」では、高等批評とは何であるかを簡潔に論じている。こうした点から見て、内村が聖書学の基礎訓練を十分に受けていると考えてよいであろう。また、先の文献表に挙げたテキストでは、かなり多くの聖書学関係の人名(デリツチ、フェアバーン、ダイスマン、ヴェルハウゼン、ハーナック、ルートハート、マイヤー、ウェスコットなど)が挙げられ、その学説について簡単に説明されている箇所も少なくない。こうした点から、内村は、当時の欧米聖書学の最新成果についても、かなりの程度精通しているように思われる。

5. 聖書と諸学

内村は聖書の説明に際して、聖書と道德、聖書と歴史、そして聖書と科学という比較を行っている。歴史については、聖書学の問題においてすでに若干ふれることができたし、また、科学との関係は、以下別に論じられるので、ここでは、道德との関係についてまとめておきたい。まず、気づくのは、ここでも、「聖書は道德である」(10/126, 11/133)と「道德でない」(6/89, 7/101, 23/207)という一見相反する主張が見られることである(なお、同様の事態は、聖書と文学との関係についても見られる)。これは、道德の教説(体系)と道德の原理、あるいは一次的(本来的)と二次的(派生的)という区別を入れることによって、整理可能かもしれない。つまり、聖書は道德の教科書ではないが、道德の原理を示すものである、あるいは、聖書は本来には道德ではないが、道德を基礎付け派生させるも

のである、と。

「聖書は道德の書ではありません 即ち所謂純正倫理を吾人に伝ふる事ではありません、聖書より道德的組織を編出すことは出来ず、然し聖書は道德組織ではありません、聖書は人が道德の本源なる神に至るの道を示す書であります」(7/101)、「聖書は戦争の廃止を強ひません、然り、或る所に於ては之を奨励して居るやうにも見えます、然しながら聖書は人命の貴重なる理由を教へて戦争をして在るべからざるものとなしつつあります、聖書は道德の原理を教へます」(7/102)。

これは、文化と宗教との関わりで言えば、宗教は文化とは異質なものであるが（あるいは超越しているが）、文化に基礎を与えるものであると、一般化できるであろう。この場合、理論的には、一定の歴史的文化的状況に規定された宗教の道德律（旧約聖書の律法）と、その根拠としての宗教との区別が問題になるであろうが（ティリッヒの言う狭義の宗教と広義の宗教）、内村の議論をこうした方向に展開することは、決して内村の意図に反した解釈ではないように思われる。また、こうした、議論を時間軸で展開したものとして、次の内村の言葉を解することも可能かもしれない。

「山上の垂訓は決して純道德ではない、其中に確固たる預言的基礎がある、山上の垂訓は又山上の預言である、預言を背景として見たる新道德の宣言である」(23/211)。

根拠づけるものとしての聖書と根拠づけられるものとしての道德体系の関係は、時間軸で見れば、聖書の預言が常に新しい道德を生み出すという事態と言えるのではないだろうか。過去に成立したテキストが未だ完成しない未来（預言・約束）を内包しており、読者はこの非完結的な過去の未来に対し自らの未来を重ね合わせるとき、そこに新しい道德（「天国に入らんが為の道德」(23/208)）が形成される。これはまさに解釈学的事態であり、内村の実験をこの観点から論じることは十分可能であろう。

以下省略

III コンテキストとレトリック

1. 思想的コンテキストとしての近代日本・日本人
2. 西洋文明の基盤としての聖書
3. 内村の思想的変化と歴史のコンテキスト

IV 宗教と科学

1. レトリックとしての科学
2. 信仰と科学との関係性
3. 自然神学と内村